

近代日本のドイツ美術受容：文芸雑誌『スバル』 『白樺』『月映』をめぐって

野村，優子

<https://hdl.handle.net/2324/1806774>

出版情報：九州大学，2016，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

(様式3)

氏 名 : 野村 優子

論 文 名 : 近代日本のドイツ美術受容
——文芸雑誌『スバル』『白樺』『月映』をめぐって——

区 分 :

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、明治末期から大正にかけて創刊された文芸雑誌『スバル』(1909年創刊)『白樺』(1910年創刊)『月映』(1914年創刊)を主たる考察対象に据えながら、これまで本格的に論じられることの少なかった「近代日本のドイツ美術受容」の実相解明を思想と実践の二面から目指す。その際、具体的に明らかにする考察内容は、近代日本における本格的な美術批評の誕生が、1907年に始まる文部省美術展覧会を契機としながらも、実際にはドイツの美術思想に親しんだ文学者たちによって促されたこと、並びに、ドイツ近代木版画の受容が明治に入って廃れた木版画を新たに甦らせ、さらには日本における抽象画の成立を促したこと、以上の二点である。

先にあげた三雑誌は、いずれも近代洋画の発展に貢献をなした文芸雑誌であるとともに、ドイツ美術受容との関わりが深い。『スバル』『白樺』は思想面での受容を、『月映』は実践面の受容を詳細にたどることができよう。事実、『スバル』や『白樺』で美術批評を執筆していたのは木下杢太郎や武者小路実篤らドイツ文化の影響下にあった文学者であり、『月映』で活躍した恩地孝四郎はドイツ美術雑誌に親しんだ木版画家であった。こうした状況があるにもかかわらず、近代日本の西洋美術受容を語る際に俎上に載せられるのは、いつも決まってフランス美術であり、ドイツ美術ではない。確かに美術の実践面ではフランスが重視されていたが、その一方で美術を言葉で支える思想面ではドイツが重要な役割を演じていた。また、恩地孝四郎によるドイツ表現主義受容、とりわけカンディンスキー受容を通じて日本初の抽象画《抒情 あかるい時》が成立した事実も忘れてはならない。本論は、以上のような「ドイツ美術受容」の実相を思想面と実践面から解明するため、各章ごとに同受容に関わりの深い雑誌を一冊取り上げながら考察を進める。

第一章では、『スバル』に掲載された高村光太郎の美術批評「緑色の太陽」を扱う。高村はドイツ語にあまり通じていなかったにもかかわらず、同論で *PERSOENLICHKEIT* などのドイツ語

を好んで用いた。従来の研究ではその理由が十分に解明されなかったが、本論の考察結果によれば、その背景には同時期ドイツ美術思想に依拠して批評活動を開始した木下杢太郎ら文学者の存在があり、彼らの活躍によって日本の芸術活動が画家主導から文学者主導へと転換し、その中で近代美術批評が誕生するという状況があったのである。第二章では、実際に当時の文学者たちに愛読された美術批評として、ドイツ人美術批評家ユーリウス・マイアー＝グレーフェの『近代芸術発展史』を扱う。ドイツに台頭したナショナリズムに抗い、自国民に来るべき美術とは何かを説いたこの書は、同じ問題を抱えた日本人にも感化を及ぼした。第三章では、『白樺』を扱いながら、『近代芸術発展史』が実際に受容された実例を示す。同書所収の論考「ゴッホ論」から多大な影響を受けた『白樺』の同人たちは、芸術と人類愛と間で懊悩するゴッホの姿に共鳴し、特に武者小路実篤の場合、同論考に近似した「ゴッホの二面」を執筆することで自身の「個人主義」へと辿り着いたのである。思想面での受容を追ってきた本論は、第四章において実践面へと目を向け、ドイツ近代木版画受容に促されて日本の木版画が再興された過程を『月映』に追う。木版画再興に貢献した恩地孝四郎のドイツ美術受容は、『スバル』や『白樺』の文学者たちのような「文字」を介しての受容ではなく、「イメージ」を介しての受容であった。文学者たちがドイツから美術を語る手段を学び、フランス近代美術を論じた結果、彼らは思想面においてドイツの影響下にありながら、実践面ではフランス美術を世に広めるという結果を招いた。そうした状況の中で恩地がフランス美術を受容しなかったのは、木版画制作を通じて油彩画だけでなくイラストにも価値を認めたからであり、また雑誌編集を通じてドイツ美術雑誌に目を向けたからである。恩地は雑誌に描かれたイメージを手がかりに自身の表現を獲得し、さらにカンディンスキーに導かれながら日本で誰よりも先に抽象表現に達したのであった。

本論で見えてきた近代日本のドイツ美術受容の帰結を恩地孝四郎の創作に見るならば、そこには日本側の状況とドイツ側の状況が折良く交差していることがわかる。日本において近代美術批評が誕生し、それを讀んだ画家がポスト印象主義へ向かい始めたその時期に、ドイツでは国際的影響力を持つ表現主義が台頭し、それは雑誌を通じて直ちに日本へと伝えられた。ポスト印象主義受容の際には三十年あったタイムラグが、ここではほとんど消え去っている。恩地がポスト印象主義を飛び越え、ドイツ表現主義を「イメージ」を通じて直に受容できたという状況こそ、近代日本におけるドイツ美術受容の重要な帰結と言えよう。